名詞句の指示機能と記述機能について

古 川 直 世

§0. はじめに

概略的に言って、名詞句は、指示機能 (fonction référentielle) をもっている。と同時に、名詞句は、この指示機能のほかに、何らかの記述内容を表わす機能、すなわち、記述機能 (fonction qualificatrice) をもっているのが通例である。名詞表現における指示機能と記述機能の一応の区別は認めてよいことと思われるが、この指示機能と記述機能のうちのどちらか一方がそれぞれ、実際の言語使用において、優先的に働くことがあるという興味深い現象がDonnellan (1966) によって指摘されている。この Donnellan の指摘は、いわば、コロンブスの卵的な指摘であると言ってよいであろう。しかしながら、Donnellan は、彼の言う指示的用法 (referential use) と限定的用法 (attributive use) の区別を定名詞句についてのみ指摘するにとどまっている。したがって、その後、指示的用法と限定的用法の区別を不定名詞句についても認めうるかどうかという観点から論じられるようになったのは、当然と言ってよい成り行きであった。しかし、これらの論者の意見は必ずしも一致しているとは言い難いので、本稿でこの問題をさらに考察してみたい。

これに並行して、この Donnellan の区別と、Hasan (1968) による定冠詞表現の照応型の分類のうち、前方照応的 (anaphoric) 定名詞句と後方照応的 (cataphoric) 定名詞句とがどのように係わっているかを考察する[1]。

さらに、名詞句における指示的部分と記述的部分へ否定の作用がどのように及ぶかを検討することによって、定名詞句と不定名詞句の相違を明らかにしたい。

なお、本稿で引用した英語論文は、英語を対象とし、英語の例文のみを引用

---

[1] 本稿では、Hasan の言う外界照応的 (exophoric) 定名詞句は、取り上げていない。というのは、本稿で前方照応的定名詞句について述べていることは、ほぼ同様に、外界照応的定名詞句についても当てはまると考えられるからである。

した論文であるが、名詞句に関するこの種の問題は、筆者の主要な関心の対象であるフランス語にも当てはまりうる性質のものである。そこで、特に支障が認められない限り、フランス語と英語を、いわば、同じ理論的土俵の上に乗せて、論を進めて行くことにする[2)]。

§1.0. 定名詞句の指示的用法と限定的用法

Donnellan (1966) において、定名詞句の指示的用法と限定的用法の区別は、次のような例によって明らかにされている。次の文は二通りにあいまいであると言う。

(1) Smith's murderer is insane.

指示的な読みでは、話者は定名詞句の指示対象である特定の個人について「狂っている」という判断を下しているのに対して、限定的な読みでは、スミスを殺害した人間が誰であれ、スミスを殺害したという行為そのものが「狂気の沙汰」なのである。

さらに指示的用法と限定的用法の相違が極立っている興味深い例を Ducrot (1972, p. 225) から借用しよう。

(2) Jacques n'aime pas sa femme, il aime la fille du patron.

(2) は少なくとも二通りにあいまいである。一つの読みでは、ジャックは妻よりも、別の女性である雇主の娘の方を愛している。もう一つの読みは、ジャックが妻を愛しているのは、妻としてではなく雇主の娘だからである、という読みである。このようなあいまい性は、まさしく、指示的用法であるか限定的用法であるかに関するあいまい性である。Ducrot は、定名詞句がもつ機能を fonction référentielle と fonction qualificatrice に分けて論じているが、これら二つの機能の関係は、Donnellan の指摘する指示的用法と限定的用法の関係に当たるものである。

しかしながら、指示的用法と限定的用法のこの区別が常に明確であるとは限らない、ということを承知しておく必要がある。定名詞句における指示機能と記述機能は必ずしも対立しあうものではなく、いわば、共存しているものであ

---

2) 本稿では、指示機能・記述機能、指示的用法・限定的用法、指示的部分・記述的部分という対をなす表現を用いているが、それぞれの対における関係は同じである。なお、指示的用法・限定的用法の訳語は、安井(1978)による。

るからである。次の例を見られたい。

(3) J'ai vu un camion et une voiture. La voiture roulait vite. (Blanche-Benveniste & Chervel, 1966, p. 9)
(4) J'ai vu une voiture. *La voiture roulait vite. (Ibid.)

(3) における la voiture は前方照応的定名詞句、すなわち、明白に指示機能をもった定名詞句であるが、この指示機能は、トラックと乗用車という意味の対比、すなわち、記述機能の対比によって補強されているのである。このことは、(4) の後半の文の容認可能性の度合いが低いことによって示されている[3]。

§1.1. 指示的用法・限定的用法と照応型との関係

以上のように、定名詞句の指示的用法と限定的用法は必ずしも対立しあうものではないということを承知した上で、今度は、このような用法の区別が、果して、すべての定名詞句に当てはまる区別であるかどうかという問題を考察してみよう。たとえば Cole (1978, p. 3) は「指示的および限定的解釈のどちらも、ほとんどすべての定名詞句表現について可能である」と述べているが、果して、そうであろうか。

結論から先に言えば、Donnellan の分類は、専ら、Hasan (1968) で言うところの後方照応用法 (cataphoric use) の定名詞句に当てはまる区別であるように思われる。

実際、Donnellan (1966) において挙げられている、指示的用法・限定的用法に関してあいまいな例は、すべて、後方照応の解釈が可能な例であると思われる[4]。たとえば前掲の文 (1) は、定冠詞を含む名詞句に書き換えると、明らかに後方照応用法の定冠詞をもつ名詞句であることが分る。

(5) The murderer of Smith is insane.
(6) The man who murdered Smith is insane.

Ducrot の文 (2) の二つの名詞句も後方照応である。一番目の名詞句 sa femme

---

[3] (4) の後半の文の容認可能性の判断についてはインフォーマントによって浮動的であるが、(4) と (3) を比較した場合、(3) が完全に容認可能な文であるのに対して、(4) は容認可能性の度合いが少くとも幾分かは低いと言えると思われる。

[4] 後方照応と他の二つの照応すなわち前方照応、外界照応との関係は、相互排他的な関係ではなく、後方照応は、前方照応あるいは外界照応と共存しうるということに注意しなければならない。前方照応と後方照応の関係については、安井 (1978, p. 206) を参照のこと。

は la femme de lui と解され、*une femme de lui は容認不可能であるからであり、同様に二番目の名詞句 la fille du patron についても、*une fille du patron は容認不可能であるからである。

何故、特に、後方照応の定名詞句が指示的用法・限定的用法に関してあいまいでありうるのかを考えてみると、一般に後方照応の定名詞句は、その記述内容が豊かであることと関連があるように思われる。このことをよく理解するには、一般に専ら指示機能のみをもつと思われる代名詞や固有名詞のような反対の場合と対比させてみるとよいであろう。

ところで、前方照応の定名詞句においては、記述機能よりも指示機能の方が優勢であると思われる。つまり、指示的用法・限定的用法に関するあいまい性は認めにくい。この問題については、不定名詞句の場合と対比させて、§2.2 において扱うことにする。

§2.0. 不定名詞句の指示的用法と限定的用法

指示的用法・限定的用法の区別を不定名詞句に当てはめうるか否かを考えてみよう。結論を先取りして述べるならば、この区別は、不定名詞句の中の特定的不定名詞句にのみ当てはまりうる区別である[5]。次の英語の例を見られたい。

(7) I talked with a logician. (Karttunen, 1968, p. 7)

Karttunen は、a logician は二通りにあいまいであって、一つの解釈は特定的 (specific) な解釈であり、もう一つの解釈は非特定的 (non-specific) な解釈であると述べているが、文 (7) におけるあいまい性は、指示的用法・限定的用法に関するあいまい性であると言ってよい。文 (7) は、話者がある特定の論理学者と話した、という意味で、名詞句 a logician は、あくまでも、特定的なのであって、その一つしかない特定的な読みの枠内で二つの読みが可能なのである。一つの読みは、Karttunen 自身の言うように、Who did you talk with this morning? に対する答となるものであって、a logician の代りに Rudolf, the author of Meaning and Necessity, a famous philosopher などを用いてもよいものである。もう一つの読みは、What kind of person did you talk with this morning? に対する答となるものであって、この問に対する答

[5] この考え方については、D. J. Peterson (1974), P. L. Peterson (1976), Ioup (1977) を参照のこと。

は a logician でなければならない。このようなあいまい性は、まさしく、指示的用法と限定的用法に関するあいまい性にほかならない[6]。

次に、指示的に不透明な文脈 (opaque context) にある不定名詞句を検討してみよう。たとえば、次の文(8)

(8) Je veux épouser un médecin.

における un médecin は、特定的・非特定的に関してあいまい性をもつが、非特定的な読みの場合は、「ともかく医者と結婚したい」という意味であって、限定的用法においてしか用いられない。しかし、特定的な読みの場合には、さらに、指示的用法・限定的用法に関するあいまい性がありうる。すなわち、一つの読みでは、「私はある人と結婚したいと思っている。その人は医者である」という、いわば無標の読みであり、もう一つの読みは、「私はある医者と、まさしく彼が医者だから、結婚したいと思っている」という読みである。しかし、このようなあいまい性が、文 (7) の場合に比べて、対話者間において、どれほど重要な意味をもってくるのかは必ずしも明らかではないと思われる。なぜなら、(7) では、過去時制の動詞の存在のために、最初から特定的な読みしかなく、その特定的な読みの中で指示的用法・限定的用法に関して二通りにあいまいであるのに対して、指示的に不透明な文脈にある文である (8) では、すでに特定的か非特定的かに関してあいまいである上に、特定的の場合には、さらに二通りにあいまいでありうるので、結局、三通りにあいまいであるという複雑さを示すからである[7]。

同様のことは、指示的に不透明な文脈にある次の文についても言える。

(9) John would like to marry a girl his parents don't approve of. (Partee, 1972, p. 415)

---

[6] Karttunen のこの文については、Ioup (1977), Takeda (1979) に比較的詳しい考察がある。なお、Takeda は、a logician には特定的な読みしかなく、この特定的な a logician が示すあいまい性が語用論上のあいまい性 (pragmatic ambiguity) であることを指摘しているが、a logician のもつあいまい性が Donnellan の指示的用法・限定的用法に関するあいまい性と同じあいまい性であるとは述べていない。

[7] 特定・非特定に関するあいまい性が意味論上のあいまい性 (semantic ambiguity) であり、指示的用法・限定的用法に関するあいまい性が語用論上のあいまい性であるとする考え方 (たとえば Ioup (1977)) があるが、この意味論上のあいまい性と語用論上のあいまい性の相違については、ここでは考慮に入れていない。なお、この問題については、Ioup (1977) のほかに Donnellan (1966, 1978), Cole (1978) を参照されたい。

Partee は、(9)は二通りにあいまいであるとしている。しかし、上述のような考え方を採るなら、(9) は三通りにあいまいであることになる。三通りのあいまい性とは、具体的に言えば、まず非特定的な解釈があり、この解釈では「ともかく両親の気に入らないような女の子(極端に言えば誰でもよい)と結婚したい」という意味であるのに対して、特定的な解釈では、さらに二つの解釈に分れ、その一つである指示的用法では「ジョンはある女の子と結婚したいと思っているが、その女の子は彼の両親の気に入らない女の子である」という意味である。もう一つの限定的用法では「ジョンはある女の子と結婚したいと思っているが、その理由は、まさしく、その女の子が彼の両親の気に入らない女の子であるからである」という意味になる[8]。

要約すれば、Karttunen の文(7)が、過去時制の動詞の存在のため特定的な読みしかなく、その枠内で指示的用法・限定的用法に関して二通りにあいまいであるのに対して、指示的に不透明な文脈にある文 (8), (9) は、特定・非特定に関してあいまいであり、特定的な読みでは、さらに、指示的用法・限定的用法に関して二通りにあいまいであり、結局、三通りにあいまいであることになる。指示的用法・限定的用法に関するあいまい性が意味論上のあいまい性であるか、語用論上のあいまい性であるかという議論については、後者であるとする意見が大勢であるが、文 (8), (9) におけるあいまい性は、文 (7) におけるあいまい性よりも語用論に係わる度合いの高いあいまい性であるとは少くとも言えるであろう。

本節の最後に指摘しておきたいことは、非特定的な不定名詞句については、文 (8), (9) においてすでに見たように、特定的な指示対象をもたないのであるから、専ら名詞句のもつ記述的部分が重要になってくる、ということである。したがって、非特定的不定名詞句は、指示的用法・限定的用法に関してあいまい性をもつことはなく、専ら限定的用法において用いられると考えてよいであろう[9]。

---

[8] 次の文は、指示的に不透明な文脈にあるにもかかわらず、目的名詞句が定名詞句であるため特定的な読みしかないので、三通りではなく、二通りにあいまいである。

(a) John wants to murder the man who lives in Apt. 3. (Partee, 1972, p. 417)

すなわち文 (a) は、指示的用法の読みでは「ジョンはある人間を殺したいと思っているが、その人間はアパートの3号室に住んでいる」の意味であり、限定的用法の読みでは「アパートの3号室に住んでいるのが誰であれ、ともかくその人間を殺したい」の意味である。

したがって、指示的に不透明な文脈にあっても、後方照応的定名詞句の場合には、あ

§2.1. 後方照応的定名詞句と特定的不定名詞句の類似性

§1.1. および §2.0. において、指示的用法・限定的用法に関するあいまい性は、専ら後方照応的定名詞句と特定的不定名詞句に当てはまるあいまい性であることを指摘した。この後方照応的定名詞句と特定的不定名詞句の類似性は、連結詞的動詞を含む命令文中の属詞 (attribut) の位置におけるそれぞれの名詞句の統辞的行動によっても確証されうる。属詞の位置にある不定名詞句が特定的であるか非特定的であるかを問うことは通例ありえないが、本稿では論議の都合上、特定的であると考えてよいと思われる[10]。次の文を見られたい[11]。

いまい性は三通りではなく二通りであることが分る。

[9] 非特定性という概念については、次のことに注意する必要がある。古川 (1978, p. 36) において指摘したように、名詞句の非特定性は、特定性とともに、上位範疇である個別性 (particulier) に属するものであり、総称性までカバーするものではない。つまり、非特定的という術語は、個別的不定名詞句に関して用いられるべきであると思われる。さもなければ、非特定性の概念が極めて漠然とした概念になる恐れがあるからである。

非特定性の概念と総称性の概念が混同されやすいことに関連して、次のことを指摘しておかなければならない。すなわち、Donnellan の指摘する指示的用法・限定的用法に関するあいまい性は、総称的名詞句ではなく、専ら個別的名詞句に当てはまるあいまい性なのである。Donnellan による定名詞句の指示的用法と限定的用法の区別に言及しているいくつかの論文中にも、これに関する混同が認められる。たとえば、次の文を見られたい。

(a) The best doctor spares no effort to save a patient. (Cole, 1978, p. 2)

(b) The blue whale swims north in February. (P. L. Peterson, 1976, p. 241)

文 (a) は、むしろ総称文であると言ってよい。文 (a) の the best doctor にあいまい性があるとすれば、そのあいまい性は、Cole の言うような指示的用法・限定的用法のあいまい性ではなく、総称的名詞句であるか個別的名詞句であるかに関するあいまい性である。the best doctor に特に修飾語句がないのであるから、総称的名詞句ととるのが自然であろう。いずれにせよ、総称的名詞句が個別的名詞句を包括することを想起すれば、文 (a) にあいまい性があるとは言い難い。

文 (b) については、文 (a) におけるよりは明瞭に、あいまい性が認められる。一つの読みでは、P. L. Peterson の言うように、That blue whale... あるいは The blue whale I saw one evening last summer... などとパラフレーズできる特定的な読みであり、もう一つの読みは、Blue whales swim north in February とパラフレーズできる一種の総称文としての (P. L. Peterson の用語によれば非特定的な) 読みである。このようなあいまい性は、文 (a) におけると同様に、Donnellan の指示的用法・限定的用法に関するあいまい性とは別個のものであると考えるべきである。

[10] なぜなら、フランス語では、次の文におけるように、

(a) Max est un boxeur. (Gross, 1977, p. 152)

(b) Max est boxeur. (Ibid.)

不定冠詞を含む名詞句と無冠詞名詞句の対立がありうるからである。Gross が述べているように、(a) における boxeur が名詞であるのに対して、(b) における boxeur は「形

(10) Soyez un héros.
(11) *Soyez le héros.
(12) Soyez le héros qu'il y a dans ce livre.
(13) Ne soyez pas un hypocrite.
(14) *Ne soyez pas l'hypocrite.
(15) Ne soyez pas l'hypocrite qu'il y a dans ce livre.

不定名詞句を属詞にもつ文 (10), (13) が容認可能であるのは、それぞれの名詞句の記述的部分が前面に出てくることができるからである。前方照応用法の定冠詞を含む文 (11), (14) が容認不可能であるのは、それぞれの名詞句の記述的部分が、前方照応という指示機能に、いわば、妨げられて、前面に出てくることができないからである。ところが、後方照応的定名詞句を含む文 (12), (15) は、不定名詞句を含む文 (10), (13) と同様に、容認可能である。以上のことから、連結詞的動詞を含む命令文中の属詞の位置における後方照応的定名詞句と不定名詞句の類似性は、明らかであろう。

さらに、後方照応的定名詞句と特定的不定名詞句の類似性は、存在文において後方照応的定名詞句と不定名詞句が示す意味的類似性によっても確められる。

鈴木(1977)は、存在文の意味上の主語の定性・不定性を論じて、定名詞句のうち存在文の意味上の主語になりうるのは、後方照応の定名詞句のみであり、この後方照応的定名詞句は意味的に不定名詞句に非常に近いことを指摘している。この類似性の因ってくるところがどこにあるのかを考察して、存在文の意味上の主語は新情報であり、後方照応的定名詞句と不定名詞句はともに新情報を担うということを述べている。

容詞の位置を占めている」。したがって、(b) では名詞 Max と「形容詞」boxeur が同一指示的 (coréférentiel) であることはありえないが、(a) では、名詞 Max と名詞句 un boxeur がそれぞれ指示対象をもち、それらが同一指示的であるとする解釈が不可能ではないからである。したがって、Max は、勿論、特定的であるから、un boxeur も特定的であることになる。

結局、属詞の位置にある不定名詞句は、あくまでも名詞句であって、名詞句であるために必然的に指示対象をもっているが、その指示対象が、属詞という特殊な統辞的位置のために、前面に出てくることがない、あるいは、前面に出てくる必要がないと言ってよいであろう。

11) これらの文は、別個の論点をもつ Kuno (1970, p. 352) の次のような文からヒントを得て作られたものである。

(a) Be a hero.
(b) Don't be a hypocrite.

鈴木(1977)の以上の指摘は、後方照応的定名詞句と特定的不定名詞句がもっている、いわば、親近性を傍証するものと思われる。なお、存在文の意味上の主語である不定名詞句が、特定的であるか非特定的であるかが問題になることは、属詞の位置にある不定名詞句の場合と同様に、通例、ありえないが、どちらかと問われれば、特定的であると答えてよいであろう[12]。

§2.2. 前方照応的定名詞句における指示機能の優位性

§1.1. の末尾において、前方照応的定名詞句は、指示的用法においてしか用いられない、ということを示唆した。このことを傍証するように思われる現象に、Gross (1977, p. 123) が référence lexicale (以下、辞書的意味照応と訳す) と呼ぶ現象がある。これは、中性代名詞によって、前出の不定名詞句の記述的部分のみを取り出すという現象である。次の文 (16), (17), (18) における、

(16) Max achète du vin, Luc en vend. (Gross, 1977, p. 122)
(17) Max achète des lits, Luc en vend. (Ibid.)
(18) Max achète un lit, Luc en vend trois à baldaquin. (Ibid., p. 123)

それぞれの意味は、「マックスはぶどう酒を買う方だが、リュックは売る方だ」、「マックスはベッドを買う方だが、リュックは売る方だ」、「マックスはベッドを一つ買い、リュックは天蓋つきのを三つ売る」である。それぞれの名詞句は、中性代名詞 en によって、その記述的部分のみを取り出されている。すな

---

[12] たとえば次の文を見よう。

(a) There is the shadow of a big dog in the dark. (鈴木、1977, p. 518)
[=Il y a l'ombre d'un grand chien dans la nuit.]
(b) There is a shadow in the dark. (Ibid., p. 519)
[=Il y a une ombre dans la nuit.]

文 (a), (b) の名詞句は、特定的でしかありえない。

存在文の意味上の主語が単数名詞句である場合には、このように全く問題なく、特定的であると言えるが、複数名詞句の場合には、総称的意味に近くなることがあるように思われる。たとえば、

(c) Il y a des chiens dans le monde entier.

は、文全体としては、極めて総称文に近い。しかし、名詞句 des chiens に注目した場合、des chiens が総称的名詞句であるとは言い難い。さらに、*Il y a n'importe quels chiens dans le monde entier. のようにパラフレーズしても意味をなさないことを考慮に入れれば、des chiens が非特定的であるとも言えない。

以上のような理由から、存在文の意味上の主語である不定名詞句は、特定的であると言ってよいであろう。

わち、指示対象の面から見ると、(16), (17), (18) それぞれの中性代名詞 en は、それぞれ前出の名詞句 du vin, des lits, un lit と同一指示的である必要はない。

文 (16), (17), (18) における不定名詞句は、非特定的不定名詞句であったが、特定的不定名詞句の場合も、辞書的意味照応の現象が観察される。次のような文は、容認可能である。

(19) Max a acheté du vin, Luc en a acheté également.
(20) Max a acheté des lits, Luc en a acheté également.
(21) Max a acheté un lit, Luc en a acheté trois à baldaquin.

Gross は、定名詞句については触れていないが、前方照応的定名詞句の場合は、この辞書的意味照応の現象は見られない。次の文は、

(22) *Max achète le vin, Luc en vend.
(23) *Max achète les lits, Luc en vend.
(24) *Max achète le lit, Luc en vend trois à baldaquin.
(25) *Max a acheté le vin, Luc en a acheté également.
(26) *Max a acheté les lits, Luc en a acheté également.
(27) *Max a acheté le lit, Luc en a acheté trois à baldaquin.

容認不可能である。

同様の現象は、別個の論点をもつ Kuno (1970, p. 349) の挙げている英語の文にも見られる。

(28) John married $\left\{\begin{matrix}\text{a}\\ \text{*the}\end{matrix}\right\}$ model, which Mary also is.

(29) The defendant says that he robbed $\left\{\begin{matrix}\text{a}\\ \text{*the}\end{matrix}\right\}$ brunette, which the witness is not.

Partee (1972, p. 419) の挙げている次のような文中の不定名詞句の読みは、限定的用法の読みが自然である。

(30) Since I heard that from a doctor, I'm inclined to take it seriously.

医者から聞いた話だから、重大に考えているのである。ところが、不定冠詞を定冠詞に変えてみると、

(31) Since I heard that from the doctor, I'm inclined to take it seriously.

名詞句は前方照応の名詞句になり、意味が変化する。事を重大に考えるのは医者から聞いた話だからというわけではなくて、「医者の中のほかならぬ例の医者から聞いた話だから事を重大にとる」という意味であるか、あるいは「例の人(その人はたまたま医者である)から聞いた話だから事を重大にとる」という意味になると思われる。この二つの解釈のいずれにせよ、指示機能が優勢であり、したがって、限定的用法というよりは、むしろ、指示的用法である。

前方照応的定名詞句の場合、何故、辞書的意味照応が不可能であるのかを問えば、まさしく、前方照応の指示機能が優勢であるため、記述的部分が、名詞句自体の中に、いわば、閉じこめられるからであると思われる。これに関しては、§3.0. 以降において、さらに明らかにしたい。

§2.3. 名詞句の指示的部分と記述的部分への否定の作用

§2.2. において、前方照応的定名詞句を、辞書的意味照応の現象を示すという特徴をもつ不定名詞句と対比させることによって、前方照応的定名詞句においては指示機能が優勢であり、限定的用法が困難であることをみた。このことは、名詞句の指示的部分および記述的部分へ否定の作用がどのように及ぶかを検討することによって、さらに確証をうることができるように思われる。

まず、名詞句の記述的部分へ否定の作用がどのように及ぶかをみてみよう。

(32) Je n'ai pas vu des singes, mais des ornithorynques. (Attal, 1976' p. 131)

(32) の意味は「私が見たのは猿ではなくて、カモノハシだ」ということであるから、特定的不定名詞句 des singes の記述的部分、すなわち「猿である」という属性が否定されているのである。des singes を単数不定名詞句 un singe に変えても事情は同じである。

(33) Je n'ai pas vu un singe, mais un ornithorynque.

次に、特定的不定名詞句 des singes, un singe をそれぞれ前方照応的複数定名詞句 les singes, 単数定名詞句 le singe に変えてみよう。

(34) Je n'ai pas vu les singes, mais les ornithorynques.
(35) Je n'ai pas vu le singe, mais l'ornithorynque.

勿論、(34), (35) は完全に容認可能であるが、前出の (32), (33) とは事情が異なっている。(32), (33) では、カモノハシの存在が主張され、猿の存在の主張

は否定されているのに対して、(34), (35) では、猿、カモノハシ両者の存在が前提とされている。話者が見たのは猿の方ではなくて、カモノハシの方である、という意味なのである。確かに、(34), (35) においても、(32), (33) と同様に、前方照応的定名詞句の記述的部分すなわち猿というクラスとカモノハシというクラスの対比が見られるが、(32), (33) の特定的不定名詞句 des singes, un singe においては、いわば、純粋な形で、その記述的部分へ否定の作用が及んでいるのである。

さて、上では、否定の作用が特定的不定名詞句および前方照応的定名詞句の記述的部分へどのように及ぶかをみた。今度は、否定（あるいは否定の一側面である強調。以下、まとめて否定という語を用いる）の作用が、特定的不定名詞句および前方照応的定名詞句の指示的部分へどのように及ぶかを検討してみよう。

次の文において、

(36) J'ai parlé avec un logicien; pas avec n'importe quel logicien.
(37) J'ai parlé avec des logiciens; pas avec n'importe quels logiciens.
(38) J'ai parlé avec le logicien; pas avec n'importe quel logicien.
(39) J'ai parlé avec les logiciens; pas avec n'importe quels logiciens.

(36), (37) は、「私が話したのはある論理学者(たち)とであって、あそこにもいるここにもいるというような論理学者(たち)と話したのではない」、(38), (39) は、「私が話したのは例の論理学者(たち)とであって、あそこにもいるここにもいるというような論理学者(たち)と話したのではない」とでも訳しうる文である。訳からも分るように、否定の作用は、特定的不定名詞句の場合も前方照応的定名詞句の場合も同様に、それぞれの指示的部分へ及んでおり、異なっているのは、訳で言えば、「ある」と「例の」の部分だけである。したがって、否定の作用が名詞句の指示的部分へどのように及ぶかに関しては、特定的不定名詞句と前方照応的定名詞句では、同じように働きうると言ってよいであろう。

ところが、すでにみたように、否定の作用は、名詞句の記述的部分に及ぶ場合には、特定的不定名詞句と前方照応的定名詞句とでは相違があり、特定的不定名詞句では、その記述的部分が、いわば、障害なく、否定されうるのに対して、前方照応的定名詞句では、その記述的部分は間接的にしか否定されえず、否定というより、むしろクラスとクラスの対比があるにすぎなかった。

また、§2.2. において、前方照応的定名詞句の場合、辞書的意味照応が不可能であることをみた。

何故、このようなことになるのであろうか？　このことを明らかにするには、まず、名詞句がもつ指示的部分と記述的部分の論理的前後関係を考察する必要があるように思われる。

§3.0.　名詞表現における指示的部分と記述的部分の論理的前後関係

Ducrot (1972) は、定名詞句における指示機能と存在前提 (présupposé existentiel) を論じて、存在前提は殆ど常に一定して定名詞句に見られるのに対して、指示機能は全く二次的な機能でしかないと主張している[13]。さらに、Ducrot は、この存在前提は、定名詞句のみならず、一般に名詞句に見られるものであるとする。すなわち、話者が aX (a は限定詞) という名詞句を用いる場合には、常に X によって示されるクラスが存在し、そのクラスは空ではないということが前提とされているのである。

このように見てくると、一般に名詞表現における指示的部分と記述的部分の論理的前後関係については、指示的部分は、記述的部分を前提とする、と考えられる。名詞表現においては、まず、クラスというものがあって、そのクラスの中から個別的な成員が取り出される、いいかえれば、指示されると考えられるからである。このことは、次のように図示されよう。

論理的前後関係	
前	後
記述的部分	指示的部分

§3.1.　指示的部分に関する前方照応的定名詞句と特定的不定名詞句の相違

名詞表現における指示的部分と記述的部分の論理的前後関係については、定名詞句と不定名詞句とで相違がないことが分った。それでは、どこに前方照応的定名詞句と特定的不定名詞句の相違があるのかと問えば、その相違はそれぞれの名詞句の指示的部分にあるように思われる。

---

13) Ducrot の言う存在前提は、本稿で言う記述的部分の存在に関する前提である。なお、Ducrot の言う存在前提と、たとえば Martin (1976, p. 47) の言う存在前提とは内容が異なる。前者では、限定詞を除いた名詞そのものによって示されるクラスの存在が前提にされているのに対して、後者では、クラスに属する個別的な成員の存在が前提とされる。Donnellan (1966, p. 111) の言う presupposition of existence は、後者と同じである。

§2.3. の文 (32)-(35) の分析においてすでに示唆したように、特定的不定名詞句では、その指示対象の特定性が話者によって主張されているのに対して[14]、前方照応的定名詞句では、その指示対象の特定性が聞き手によっても了解済みであると話者が考えている、すなわち話者は指示対象が特定的であることを前提としているのである。このことは、次のような文を見れば、さらに明らかになるであろう。

(40) Un soldat montait la garde devant le palais. (Martin, 1976, p. 49)
(41) Le soldat montait la garde devant le palais. (Ibid.)

(40) では、一人の兵士の存在が主張されているのに対して、(41) では、その存在は聞き手も了解済みのこととして、前提とされている。

以上のことは、次のように図示することができよう。

	前　　提	主　　張
前方照応的定名詞句	指示的部分の特定性	
特定的不定名詞句		指示的部分の特定性

§3.2. 各名詞句における指示的部分と記述的部分の位置

§2.2. において、前方照応的定名詞句の場合、辞書的意味照応が不可能なことを確認し、§2.3. においては、否定の作用が、指示的部分へは、特定的不定名詞句においても前方照応的定名詞句においても、同様に及ぶが、記述的部分へは、特定的不定名詞句と前方照応的定名詞句とでは違いがあり、特定的不定名詞句の記述的部分へは自由に及びうるが、前方照応的定名詞句の記述的部分へは間接的にしか及びえないことを確認した。そして、何故、このようなことになるのかという疑問を提出したのであった。

この疑問を解くために、§3.0. において、名詞表現の指示的部分が記述的部分を論理的に前提とすることを述べ、§3.1. では、指示的部分に関する前方照応的定名詞句と特定的不定名詞句の相違がそれぞれの指示的部分の特定性が前提とされているか主張されているかの相違であることをみた。

今や、この疑問に明確に答えることができる段階に到達したと思われる。前二節の図表と §2.2., §2.3. の内容をまとめて図示すれば、次のようになるで

[14] 勿論、その主張が焦点 (focus) になっているかどうかは、別個の問題である。

あろう。矢印は否定の作用の及ぶ範囲を示し、矢印が記述的部分に及んでいる場合には、辞書的意味照応が可能なことを示す。

	前　提 (2)	前　提 (1)	主　　張
前方照応的定名詞句	記述的部分	指示的部分	
特定的不定名詞句		記述的部分	指示的部分
否定の作用と辞書的意味照応		←――――	――――

前提(1)と前提(2)の相違は、前提の、いわば、深度の相違である。

否定の作用は、前方照応的定名詞句の場合には、指示的部分にしか及びえず、記述的部分には間接的にしか(クラスとクラスの対比としてしか)及びえない。これは次の文に見られる通りである。

(42) [=(34)] Je n'ai pas vu les singes, mais les ornithorynques.
(43) [=(35)] Je n'ai pas vu le singe, mais l'ornithorynque.

これに対して、否定の作用は、特定的不定名詞句の場合には、指示的部分のみならず、記述的部分にまで及びうる。(44), (45) では、指示的部分が否定されており、(46), (47) では、記述的部分が否定されている。

(44) [=(36)] J'ai parlé avec un logicien; pas avec n'importe quel logicien.
(45) [=(37)] J'ai parlé avec des logiciens; pas avec n'importe quels logiciens.
(46) [=(32)] Je n'ai pas vu des singes, mais des ornithorynques.
(47) [=(33)] Je n'ai pas vu un singe, mais un ornithorynque.

前方照応的定名詞句の場合、次の文におけるように、辞書的意味照応は不可能であった。

(48) [=(22)] *Max achète le vin, Luc en vend.
(49) [=(23)] *Max achète les lits, Luc en vend.

何故、以上のようになるのかは、図表から、もはや、明らかであろう。前方照応的定名詞句の場合、指示機能、すなわち前提 (1) の位置にある指示的部分が、優勢であるために、論理的に先行した前提 (2) の位置を占める記述的部分

には、否定の作用が及びえず、また、辞書的意味照応によって、記述的部分を取り出すこともできないのである。

さて、これまで、辞書的意味照応と、名詞句の指示的部分と記述的部分への否定の作用については、定名詞句の中では、前方照応的定名詞句のみを検討し、後方照応的定名詞句については、必ずしも明確ではない点があるので、一応、考慮の外に置いてきた。ここで、後方照応的定名詞句を、前頁の図表の中に位置づけるとすれば、どこに位置づけられるかを考えてみよう。§2.1. では、後方照応的定名詞句と特定的不定名詞句の間の類似性のみを追求したが、後方照応的定名詞句と特定的不定名詞句とは、いかに意味上の類似性をもつとは言え、やはり、定名詞句と不定名詞句の相違が、どこかに、あるはずである。そこで、このことを明らかにするために、新情報、旧情報の概念を導入して、前頁の図表を、さらに、精密に書き直せば、次のようになると思われる。

	旧情報		新情報	
	前提(3)	前提(2)	前提(1)	主張
前方照応的定名詞句	記述的部分	指示的部分		
後方照応的定名詞句		記述的部分	指示的部分	
特定的不定名詞句		記述的部分		指示的部分
否定の作用と辞書的意味照応		←		

前方照応的定名詞句については、その記述的部分も指示的部分も旧情報に属している。

後方照応的定名詞句については、その指示的部分は、新情報に属し、さらに、その中の前提 (1) の位置を占めている。後方照応的定名詞句の指示的部分は、図表から見ると、否定の作用を受け得る位置にあるが、もし実際には受け得ないとすれば、何らかの言語外的な原因があるように思われる。たとえば、後方照応的定名詞句が定冠詞を含んでいるのは、前方照応的定名詞句の場合とは異なって、話者の意の及ばない何らかの論理的必然性によって、そうなっているのであり、したがって、否定の作用も及びえない、とも考えられる。後方

照応的定名詞句の記述的部分へ否定の作用が及びうるかどうかについては、筆者には今のところ、明らかではない。しかしながら、辞書的意味照応が可能であるかどうかということについては、§2.1. でみたように、命令文中の属詞の位置に立ちうるから、当然、可能である[15]。

特定的不定名詞句については、その指示的部分は、新情報であり、主張されている。その記述的部分、いいかえれば、その辞書的意味は、通例、新情報であることはないから、旧情報に属することになる。なお、記述的部分と指示的部分が連続する必然性はないことに注意すべきである。

§4. 結　論

本稿における主張を要約すれば、次のようになる。

(1) (a) Donnellan の指摘する指示的用法・限定的用法の区別は、定名詞句の場合には、専ら後方照応的定名詞句にのみ当てはまる区別である。

(b) 前方照応的定名詞句の場合には、指示機能が優勢であるので、指示的用法・限定的用法に関するあいまい性はなく、専ら指示的用法において用いられる。このことを傍証するものとして、前方照応的定名詞句の場合には、辞書的意味照応の現象が見られないということ、さらに、否定の作用がその記述的部分へ及ぶことができないということがある。

(c) 指示的用法・限定的用法の区別は、不定名詞句の場合には、特定的不定名詞句にのみ当てはまる。

(d) 非特定的不定名詞句の場合には、記述機能が優勢であるので、指示的用法・限定的用法に関するあいまい性はなく、専ら限定的用法において用いられる。

(1) (a) から (1) (d) までの内容を図示すれば、次頁のようになる。なお、図中の RF, rf は指示的部分を、AT, at は記述的部分を指す。RF / at は、指示的部分が優勢である、すなわち指示的用法であることを示し、rf / AT は、記述的部分が優勢である、すなわち限定的用法であることを示す。この表記法は、別個の問題を扱っている Gondret (1976) に倣ったものであるが、名詞句においては、一般に、指示的部分と記述的部分は、いわば、その力関係に相

---

15) たとえば、次のような対話が可能である。
— Ne soyez pas l'hypocrite qu'il y a dans ce livre.
— Mais, je le suis déjà !

違はあっても、殆ど常に共存していることを考えれば、妥当な表記法であると思われる。

定名詞句	前方照応的定名詞句	RF/at
	後方照応的定名詞句	RF/at
		rf/AT
不定名詞句	特定的不定名詞句	RF/at
		rf/AT
	非特定的不定名詞句	rf/AT

最後に付け加えておきたいことは、Donnellan の指摘する指示的用法・限定的用法の区別は、総称的名詞句ではなく、個別的名詞句に当てはまる区別である。総称的名詞句においては、指示的用法・限定的用法のあいまい性はなく、記述機能が優勢になる。

Bibliographie

Attal, P. (1976). "A propos de l'indéfini *des*: Problèmes de représentation sémantique", *Le français moderne*, 44e année, N° 2, pp. 126-142.

Blanche-Benveniste, Cl. & A. Chervel (1966). "Recherches sur le syntagme substantif", *Cahiers de lexicologie*, IV. pp. 3-37.

Cole, P. (1978). "On the origins of referential opacity", in Cole (ed.), *Syntax and Semantics*, 1978, New York, Academic Press, pp. 1-22.

Donnellan, K. (1966). "Reference and definite descriptions", *Philosophical Review*, 75, 1966, pp. 281-304. Also in Steinberg and Jakobovits (eds.), *Semantics*, 1971, pp. 100-114.

——— (1978). "Speaker reference, descriptions and anaphora", in P. Cole (ed.), 1978, pp. 47-68.

Ducrot, O. (1972). *Dire et ne pas dire*, Hermann.

古川直世(1978).「フランス語における総称名詞句の特性」、『文芸言語研究』、言語編、3。

Gondret, P. (1976). "Quelques, plusieurs, certains, divers: Etude sémantique", *Le français moderne*, 44e année, N° 2, pp. 143-152.

Gross, M. (1977). *Grammaire transformationnelle du français, syntaxe du nom*, Larousse.

Hasan, R. (1968). *Grammatical Cohesion in Spoken and Written English*, Part 1, London, Longman.

Ioup, G. (1977). "Specificity and the interpretation of quantifiers", *Linguistics and Philosophy*, 1, pp. 233-245.

Karttunen, L. (1968). What do referential indices refer to?, Indiana University Linguistics Club.

Kuno, S. (1970). "Some properties of non-referential noun phrases", in Jakobson and Kawamoto (eds.), *Studies in general and oriental linguistics*, Tokyo, TEC Company, pp. 348-373.

Martin, R. (1976). *Inférence, antonymie et paraphrase, Eléments pour une théorie sémantique*, Klincksieck.

Partee, B. H. (1972). "Opacity, coreference, and pronouns", in Harman and Davidson (eds.), *Semantics of Natural Language*, D. Reidel Publishing Company, pp. 415-441.

Peterson, D. J. (1974). *Noun Phrase Specificity*, Ann Arbor, Michigan, Xerox University Microfilms.

Peterson, P. L. (1976). "An abuse of terminology: Donnellan's distinction in recent grammar", *Foundations of Language*, 14, pp. 239-242.

鈴木英一 (1977).「存在文の意味上の主語と定性・不定性」、『山形大学紀要(人文科学)』、第8巻第4号、pp. 517-543.

Takeda, S. (1979). Reference and Noun Phrases, unpublished doctoral thesis, University of Tsukuba.

安井稔(1978).『新しい聞き手の文法』、大修館書店。